
転生者は咲夜さん？

NA SU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は咲夜さん？

【Nコード】

N0956BA

【作者名】

N A S U

【あらすじ】

テンプレ的展開により『ネギま』の世界に転生することになった。本当はデイオになりたかったのだが……どう見ても咲夜さんです、本当にありがとうございます。性別は勿論女、にも関わらずイケメン咲夜さんの顔。恋愛なんて諦めて細々と原作介入しよう……。

Part・0 (前書き)

皆さん初めまして、

『N A S U』と申します。

初なので駄文、読みにくい、誤字脱字などありますが時間が
ある時などを使って頑張って書いていこうと思います。

Part・0

突然だが俺は転生者だ。

……いや、頼むからそんな目で見ないで下さい。本当の話なんです。テンプレなんですよ。

俺が死んだ理由は、コンビニに入ろうとしたら後ろから車が突っ込んで来たからだ。

たまにテレビでやってる衝撃映像だかなんだかの死んじゃったパターンだな。

そして気がついたら真っ白い空間。オタクだった俺はすぐに理解したね。

これがテンプレか、と

そこからは大体予想通りだった。少し違ったのは容姿を選べず、選んだ能力によって容姿が決まってくるという事と、転生者は15人まで同時に存在出来るという事だ。

例えば、『王の財宝』を選べば容姿はギルガメッシュになりやすくなる。

そういう訳で俺は『ザ・ワールド』と『ナイフ使いの才能』を希望した。ここまで言えばわかるだろう？

俺はデイオになりたかった。ナイフの才能を希望したのは俺の見ただ格ゲーでナイフを投げまくっていたからだ。あれはきつと相当な

技術が必要だと勝手に思った。

因みに俺の行く世界は『ネギま』らしい。

俺はこれからの事を考えてすっかり忘れていた事があった。

確実にデイトになりたければ吸血鬼になる必要があったこと。そして二次創作や、とある格ゲーで『ザ・ワールド（以後、世界）』を使う『完璧で瀟洒なメイド』の存在を。

Part・i (前書き)

書き方がよくわからない……

どうしてあんなに文字をかけるんだ……

Part・1

「なぜだ……。」

鏡の前に立って呟いたのは3歳位の少女だ。髪の色は銀色で目の色は赤と言うより紅色だ。彼女は子供とは思えない口調で子供らしく叫ぶ。

「なんで、でいおじゃないんだああああ!!!!!!」

俺は生まれた時から望みを捨てなかった。生まれた時に両親が

「かわいい女の子だ!」

とか叫んだ時も、

「この娘の名前は咲夜だ。」
と言われた時も、

「お前に似て銀色の髪をしている。」

と話してた時も、

俺は『きつと女の子で咲夜という名前だがきつとディオの2Pカラー的な感じで銀髪のディオな見た目』という無駄無駄アな仮説を頑なに信じていた。

…… たつた今打ち砕かれたが。

「わかっていたさ……、名字だって十六夜だったし、そもそも女に生まれた時から予想はしてたんだ。」

認めたく無かったただけだが。

因みに両親とも魔法使いである。だが、どこかに所属している訳ではなく大戦を機にフリーの魔法使いとして旧世界に来たらしい。

偶に政治家らしき人も依頼に来るらしいから中々の腕前らしい。母さんの話では十六夜家の伝統だかなんだかで4歳の誕生日に十六夜専用のアイテムが貰えるらしい。

……なんか神の意思を感じる。早く4歳にならないかなあ……。

キング・クリム（ry

4歳

今日は誕生日なんです。が両親の仕事の都合で現在エジプトにいます。

なんでも政治家の護衛だそうです。面倒くさい。小さなホテルの1フロア貸切で宿泊中の俺達は誕生日会と言うよりは家宝を譲る儀式見たいな雰囲気です。

「これが十六夜家に伝わる家宝だ。」

そう言っ父さんが取り出したのは懐中時計。神はそこまで咲夜にしたいか、チクショー。

「これは只の懐中時計ではない。魔法球を改造したものらしく、この中からは無限にナイフが出せる。今からこれを咲夜渡すから1日身につけていなさい。」

「わかったよ父さん。」

そう言いながら時計を受け取る。

「手を近づけて念じれば出てくる。わかったか？」

とりあえずナイフを出したり消したりしてみる。よし、覚えた。

「明日は早いからもう寝なさい。」

「その前にトイレ行って来るわ。」

時計をポケットにしまい、トイレに入る。そして鍵を掛けた瞬間に

大きな振動と爆発音が聞こえた。

Part・2 (前書き)

こんな駄作を読んで下さった皆さん、ありがとうございますううう
う!!!!

はつきり言って全然自信ないんですけど……
まともに書ける様に努力します(´・`・´)

Part・2

くそつ、ホテルが爆発って規模は違うがケイ〇ス先生と同じ状況じゃないか！ていうか崩落してるじゃないか、このホテルは！！

「うわぁっ」

まずい、足場がつ！

俺の身体は落下を始める。言い忘れていたがここは4階。高そう
で低い微妙な位置だ。

「くそつ、いい加減に出てこいよ、『世界』ッッ！！」

だが出ない。俺が生まれた時から試しているのだが、『世界』は
一度も出た試しがない。もしかしたら神のミスで出なくなっ
てそのお詫びとして懐中時計をくれたのかもしれない。

だんだんと地面が迫って来る。俺は…死ぬのか？
そう考えた瞬間から耐え難い恐怖が身体を駆け巡る。

嫌だ、死にたくない。

ただその言葉だけが頭の中を埋め尽くす。だが地面はどんどん迫
ってくる。そんな中俺に出来た事は、ただ叫ぶだけだった。

「ああああああ！！！！」

だが俺は助かったらしい。地面に激突するのが怖くて目をつぶった俺は気が付けば父さんの腕の中にいた。

「大丈夫か、咲夜。」

「父…さん？」

父さんは身体の至るところから血を流し負傷していた。

「な…んで…」

「咲夜、早く逃げなさい。あっちに向かって真っ直ぐに走りなさい。」

父さんが指した方向には繁華街があった。

「政府の方や護衛の一部はあっちに向かった。合流すれば安全なはずだ。さあ早く、走りなさい！！」

父さんに場所を教えられた瞬間から俺は走りだしていた。ただ逃げる事しか考えてなかった。

だから気付けなかった。

後ろから聞こえた筈の父さんの悲鳴も。

視界の端に一瞬、だがはつきりと見えたはずの切り刻まれた銀髪の女性の死体も。

「ハア……ハア……」

ただ走って、走り続けて、俺は広場の様な場所に辿り着いた。そこには高そうなスーツを着た政府の人や、銃火器を持った護衛の

死体があった。その真ん中に1人の男が立っている。

「おい、十六夜のお嬢ちゃん……時計持ってるだろ？俺にくれや。」

「なんで……」

それだけ言うのがやっとだった。この男には見覚えがあった。父さんや母さんと何度か一緒にいるのを見た。護衛のはずだった。

「なんでかって？依頼されてたんだよ、この政府のゴミを殺れって。」

「そして十六夜のお宝を持って来いってなあ！」

なんとなく予想はしていた。ナイフをだすだけだが仕組みが解れば強力な兵器を作れる。核を無尽蔵に出せる様になるかもしれない。狙われるのは必至だった。

「もう生きてるのはお嬢ちゃんだけだ。俺だって子供を殺すまでは腐っちゃいねえ。」

そう言いながら男は持っていた杖をしまい銃を構える。

「大丈夫だ、『殺しは』しない。」

男が笑ったのと吹っ飛んだのは殆ど同時だった。

「やれやれ、人の縄張りで何をしているかとおもえば……」

見間違える筈が無かった。

「誰だデメエは!!」

見間違える筈が無かった。長身で、紅い目をしていて、そして何より首にある『星形』のアザ。

「この野郎ッ!!」

男が銃を乱射するか全て何かに弾かれる。

「貴様…、この『ディオ』に対する無礼、許されると思っなッ!!」

そこにいたのは俺が望んだ、憧れた人物

ディオ・ブランドーがいた。

Part・2 (後書き)

いきなりですが、後々登場させようと思っている東方キャラについてアンケートを取ろうと思います。
無理に投票しなくても大丈夫です、はい。

あ、1人一票までですよ)、・・)

以下が候補です。

- 1 さなえさん + 法王の緑
- 2 うどんげ + 皇帝
- 3 どっちも出そうぜ!

この他にも案があれば遠慮なく言って下さい。私が気に入った物があれば候補にあげます。以上です。

Part・3 (前書き)

質問にもあつたのですが、今は大戦も終わってアリカも救出した後です咲夜は真帆良から原作入ります。

あと、スタンドについてですが、漢字からカタカナに直すことにしました。読みにくいかも知れませんが許して下さい(´・`・´)

Part・3

現在俺はディオ様（流石に呼び捨ては無理）に連れられてある場所に向かっているらしい。どうやら仲間がそこにいるらしい。

え？さっきの男はどうしたって？空烈眼刺驚（目からビーム）で一撃だったよ。あいつは話を聞かなかったからな。

そういえば彼も転生者らしい。もっともそれについて詳しく聞くこととして

「後で話す。」

の一点張りだが。
ただ、いつ転生したか位教えてくれてもいいと思うんだけど……。

考えながら歩くこと20分。どうやら到着したらしい……が……

「そのまんまじゃないか……。」

どう見ても『DIOの館』です、本当にあり（ry
ていうかこの世界ってネギまだよな？ジヨジヨじゃないよな？

「着いていい。」

それだけ言って歩きだすディオ様。うーん、仕えてる訳でもない

のに様付けつていうのもなんだかなあ。

「って、早い早いよ、置いてかないで!!」

流石ディオ様、とても真似できないスピードで歩いていく。そこに痺れ（ry

そういうわけで館に到着。入り口である門にはジョジョの原作通り一匹の鳥、確か隼のペットシヨップと、

原作ブレイクな犬、ていうかイギーがいた。え？なんでここにいるの？そもそもジョジョキャラがいるって事自体ツツコミたいのになんで敵の本拠地の門番なんかしてるの？

てかスゲー警戒されてるし、凄く吠えてるし。入れないんだけど。

「やれやれ、イギーにも困ったものだ。」

そういつて何かを取り出すディオ様。まあただのコーヒーガムだけど。それをイギーの前に放る。その途端俺には目もくれずに食べはじめるイギー。

それでいいのが、イギーよ。

その後、ディオの私室に案内された。ここまで来る途中に色々見

たことある方々がいました。主にスタンド使いの方々ですけどね！！

「さて、さっきも話したが私は転生者、ディオ・ブランドーだ。」

「俺……私は、十六夜咲夜です。」

「君の前世は男のようだな。ならば言葉遣いは無理に直さなくてもいい。」

「……すみません。」

自己紹介も済んだし色々聞こうと口を開きかけたが、彼から話してくれた。

「まず君には色々聞きたい事があると思うが先に私が話をしよう。それから質問があれば何でも聞くといい。」

そういつてから彼は話し始める。

「そうだな……、まずは」

「と、いうわけだ。何か質問はあるか？」

ディオの話。それは彼の生まれから始まった。どうやら彼の父親はダリオと言っらしい。そしてダリオが死にジョースター家に預けられたらしい。

ここまで話せばわかると思うがどうやらこの世界はネギまを中心としているが世界を探せばゲームやアニメのキャラクターがあり、それに基づいたストーリーもあるらしい。最もネギま自体をおかしくするような、例えば時空管理局が出てくるようなストーリーは無いらしい。海鳴市はあつたみたいだが。

そういうわけでジョジョのストーリーもあつたらしいがディオである彼は転生者だ。養父であるジョージ・ジョースターを殺すつもりは無く、普通にジョナサンの友人として生きてきた。

しかし何者かがジョージを毒殺しようとし、ディオは濡れ衣を着せられて、その成り行きで石仮面を被ってしまったらしい。そこからは物語は進むが最終的にジョナサンとは和解し、今はSPW財団とも手を組んでいるという。

そして今、彼らは原作の保護をやっているらしい。保護というのは過激な転生者を始末する仕事だ。力に溺れ、欲望を曝け出し、他人を見下す様な奴らを既に彼自身も10人程殺したらしい。

そして最後に聞いたのは、彼と契約すると既出のスタンドがアーティファクトになる、という話だ。因みにディオも含め、彼らは本物のスタンドらしい。

「その話は本当なのか？」

「これが本当なら俺は……」

「ああ、間違いないだろう。先日、電信柱………ポルナレフが拾っ

てきた、確か妖夢だったか。彼女も仮契約をした際に『シルバー・チャリオッツ』を手に入れた。信憑性は高い。」

「……………俺は突っ込まない、突っ込まないぞ。とりあえず俺は席から立ち上がり、

「仮契約してくれ。」

この際キスしてでもアーティファクトが欲しい。まだ決まった訳ではないが間違いなく『ザ・ワールド』が手に入るだろう。キスくらい安いものだ。

「いいだろう、着いてこい。」

案内されたのは大きな魔方陣が描かれた部屋。既にディオ様は部屋に入って何か準備をしていた。

準備？

「なあ、仮契約ってキスじゃあ無いのか？わざわざ準備する必要無いだろう？」

そう尋ねると彼は立ち上がり、

「なんだ、知らないのか？確かにキスが一番楽だが方法は他にも色々ある。この部屋は既に面倒な作業を終えた契約用の部屋だ。さっさと終わらせるぞ。」

そういえばそんな話もあったな。すっかり忘れていた。そして後半は知らない、初耳だよ。なんだその技術は。

仮契約は無事に終わり、俺の手には一枚のカードがある。

「アデアット」

一瞬カードが光り形を変えていく。そこには

「ふむ、やはりな。」

「やっと、やっとだ……。」「

この日、ようやく俺は『ザ・ワールド』を手に入れた。

Part・3（後書き）

因みに前回出番が終わった両親の強さですが……

第4次聖杯戦争のアッサシンの活躍くらいの強さです。
敵だった男は北斗のアミバくらいの強さです。

……基準と表現が微妙すぎて泣ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956ba/>

転生者は咲夜さん？

2012年1月5日01時52分発行